様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　３１日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007　～　2009
課題番号：19791787
研究課題名（和文）　ホームレスの健康を促進する看護支援のあり方

研究課題名（英文）　Nursing Support to Promote Health of the Homeless

研究代表者
白井　裕子（SHIRAI　HIROKO）
愛知医科大学・看護学部・助教
研究者番号：40351150

研究成果の概要（和文）：炊き出しの場所で，ホームレスの人々が主体的に自身の健康に取り組んでいけることを目指した健康支援活動を実施した。自己の健康を知る機会のなかった人々が，それを知ることを通して，健康に対する意識の変化や健康行動を獲得していくことにつながった。また、活動を積み重ねることで「互いに思いやる身近な存在としての関係」が構築された。この関係性は，支援活動の成果であるが、その一方で支援関係の基盤でもあった。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：ホームレス、地域看護、健康相談、健康教育、主体的参加

１．研究開始当初の背景

近年の産業構造の変化やバブル経済崩壊後の経済停滞と不況のなかで、ホームレス数は急増した。2002年「ホームレスの自立のための特別措置法」が公布・施行され、ホームレスの自立支援事業が開始されているが、自立支援センター等に入所したホームレスが途中退所して再野宿になるなど、ホームレスの減少は顕著でない。また、今なお新しくホームレスになる人々も多く存在している。

ホームレスは様々な疾患を抱えながら生活しているにもかかわらず、今日の食糧を確保するために仕事（アルミ缶回収等）を優先しなければならないこと、医療職者による差別的な扱いや受診してもどうせ治らないという理由から病院受診に積極的でない、自分自身の健康をあきらめてしまっているなどの状況がある。

これらのことから、ホームレスの日常生活の中で健康に関心を向ける機会を提供し、健康相談や健康教育などを通してホームレス自身が自らの力で健康を高めていける健康支援活動が必要であると考えた。

２．研究の目的

（１）健康支援活動を通して、ホームレスの健

康を促進する。
（２）（１）の結果から、看護職者が行う効果的な健康支援のあり方を明らかにする。

３．研究の方法
（１）研究の概要
ホームレスの人々が集まる炊き出しの場所で，「健康コーナー」として、健康支援活動を実施した。その際，ホームレスのニーズや，他地域におけるホームレス支援団体の知識や技術などを健康支援活動に活かした。
参加観察及び健康コーナー利用者のアンケートから，活動の効果を分析した。

（２）健康支援活動の具体的な実施方法
中核都市Ａ市で毎週行われている炊き出しの場所で，月２回，健康コーナーとして健康支援活動を実施した。
（2007 年 8 月下旬～2010 年 3 月下旬）
①環境境づくり
自動血圧計，血圧手帳，体温計，爪きり，綿棒・耳かき，体重計，体脂肪率計を準備し，誰でも自由に使用できるようにした。また，血圧の正常値を示したボードを自動血圧計付近に設置し，それぞれが測定値を確認できるようにした。
なお、血圧測定については、自動血圧計ではなく、直接測定してほしいという場合も多く、その場合は要望に応えた。
②知識や技術の提供
配布するビラに，健康に関する情報や対処方法や，身近にあるもの（塩など）を活用した健康づくりの知識や方法などを掲載した。また，健康づくりのきっかけになるよう塩・マスクを希望者に配布した。
測定に来る各個人に対しては，測定値をもとに現在の体調について確認し，改善方法を一緒に考えた。また，個々のニーズに合わせて，その都度健康に関する情報を提供した。
③困っていることや希望を引き出す関わり
健康に関することだけでなく、今の生活についても積極的に話すよう心がけた。
また日常の会話や健康に関する話題の中から，生活の中で困っていることなどを引き出せるような声かけをした。どうしたいか本人の希望を尊重しながら，その可能性を一緒に検討した。

（３）健康への関心とニーズ調査の実施
炊き出しに集まる人々で，同意の得られた人に対し，a. 現在の健康状態，b. 日頃健康のために継続していること，c. 健康を保つためにしてほしいこと，の３項目について聞き取り調査をした。
（2008 年 10 月 16 日, 10 月 30 日, 11 月 6 日）

（４）他地域の支援団体の活動への参加
協力の得られた支援団体の看護職者が行っている支援活動に参加し、工夫された方法点や技術や知識などを得た。
（4 団体）

（５）評価アンケートの実施
健康コーナー（研究者が行っている健康支援活動）を利用したことのある人で，同意の得られた人に対し，a. 現在の健康状態，b. 健康コーナーの利用頻度とその内容，c. 利用してからの健康意識と行動の変化，d. その他要望，の 4 項目について聞き取り調査をおこなった
（2010 年 2 月 18 日，3 月 4 日，3 月 18 日）。

（６）参加観察
健康コーナーを利用している人々の様子、当事者同士の関わり、研究者との関わりなどをフィールドノートに記載した。

（７）データの分析方法
参加観察の記録，健康コーナー利用者の評価アンケート結果から，ホームレスの人々の健康意識や健康行動の変化，効果的な健康支援のあり方について，質的に分析した。

（８）倫理的配慮
①質問紙調査に関すること
炊き出しに集まる人々に対し，予め、a. アンケートの目的，b. 聞き取り項目，c. 研究協力は強制ではないこと，d. 氏名は聞かないこと，e. アンケートを行う日時を，書面と口頭で、説明した。アンケート実施日には，同様に説明し，協力してもよいと思った人のみ，実施場所（炊き出しの場所の一角）に来てもらった。
研究協力者に対しては，答えたくないことがあれば答えなくいいことも加えて説明した上で実施した。
②参加観察に関すること
フィールドノートへの記載の際、個人が特定できないよう（個人名、会社名、団体名などの記号化）十分留意して記載した。
参加観察における研究協力への同意については、活動を行うテーブルに研究の目的や方法を記載した書面を掲示しておいた。
③他地域におけるホームレス支援団体の活動への参加に関すること
研究の目的と方法を書面で説明し、協力を得た。活動に参加することによって知り得た個人情報については口外しないことや、通常の活動が円滑に進むような配慮しながら参加した。
４．研究成果
（１）健康支援活動を通した健康への意識及び行動の変化
①自分自身の健康に関心をもつきっかけに

つながった。

a. 各人が自由に血圧、体重等の測定をしていた。また研究者に直接血圧測定を依頼する場合も多かった。爪切りや耳かきの利用も多かった。

b. 定期的かつ継続的な活動によって，同じ人が継続的に血圧測定などに来るようになった。また血圧手帳に測定値を書き込み，比較しながら自己の健康状態を把握する人も少なくなかった。

c. マスクや塩に関心をむけ，足を止める人が多かった。使用方法について，具体的に説明すると「やってみる」と言って，もらっていく人もいた。また，マスクの効果的な着用方法について，自ら質問されることもあった。

②それぞれの健康行動に変化を起こすきっかけにつながった。

＜当事者同士の会話の中で変化を起こすきっかけにつながった例＞

a. 測定値を自ら他者に伝え，健康状態の評価や生活の改善点などの意見を提案し合っていた。そのことにより、生活の中でその人自身ができる改善点が具体的になっていた。

b. 配布した塩の使い方について，当事者同士が具体的な生活場面を例示しながら，説明しあっていた。

＜測定値やその場の会話によって変化を起こすきっかけにつながった例＞

a. 高血圧の既往があったが，血圧測定の機会に恵まれず，放置せざるを得なかった人が，健康を心配して血圧測定にくる場合もしばしばあった。測定値から自己の健康状態を知ることにより，「受診する必要がある」と自分で判断して行動につながることもあった。また，本人が迷っている場合は，研究者が後押しすることによって，「そうか」といって決断される場合もしばしばあった。

b. 高血圧の既往歴のない場合でも，測定値が高い場合は，定期的に測定し，血圧手帳に書き込んでいくことを提案した。手帳に記入して，継続的に健康管理をしていく人もいたが，手帳に記入しなくても自分の測定値をだいたい覚えており，継続的に測定し，健康状況の変化を考えながら生活している人もいた。

c. 体脂肪率の測定の結果，測定値の高かった人が，自己の食生活を振り返り，実行可能な方法を自ら考え，行動変化を起こそうとしていた。

d. 貧血のある人が，鉄分を含んだ食材を多くとる食生活に気をつけていることを話され、その方法でよかったこと、それを継続していくことが重要であることを再確認された。

e. 研究者が，意図的に食生活や仕事のことなどの声かけを行うことで、幅広い話題をもつことができた。こうした何気ない会話の中から、実は「アパートに入りたいと思っている」など生活そのものの変化につながる希望を表現される場合もあり，制度の利用につながった例もあった。

＜研究者との関係の積み重ねを通した例＞

a. 数ヶ月間，遠巻きにしてみんなを見ていた人が，ある日血圧測定を希望し，その後継続的に測定にきた。また，遠巻きに見ていた人に，あるとき研究者から声をかけることによって，継続的な利用につながる例もあった。

b. 関係を積み重ねていくうちに，「もともともっている脳血管疾患の症状が悪化している。心配」という胸の内を表現された。その後，対処行動を起こす第一歩につながった。

c. 高血圧の治療を中断してしまった人が，その理由や今後の希望を語ることを繰り返し，再治療の気持ちを取り戻すことができた。孤独で将来の目的がないことから「もうどうでもいい」という気持ちになっていたが、日常生活のこと、今までの人生のことなどを何度も語り合うことを通して、再び行動を起こしてみようという気持ち自然に変化していった。

d. 高血圧で受診をしたいが，希望を伝えても施設職員が聞く耳を持ってくれないとい言う人に対して，「血圧手帳を見せながら要望する」ことを提案した。その結果，受診することができ，定期受診の際にも医師に手帳を見せながら経過報告をしているとのことだった。

③自身の生活の中での健康行動を獲得することにつながった。

a. 毎回希望者に配布している嗽用の塩をきっかけにして，うがいの習慣を身につけた人がいた。

b. 高血圧の人で，配布している血圧手帳をきかっけにして，毎日電気屋等で測定し記録をつけることが習慣化された人がいた。

(2) 健康への関心とニーズ調査の結果

「現在の健康状態」「日頃健康のために継続していること」「健康を保つためにしてほしいこと」の3項目について聞き取り調査をした。協力者は40名(男性36名,女性4名)であった。

①現在の健康状態

「よい」と回答した人は14名,「悪い」と回答した人は26名であった。

「悪い」と回答した人の症状は、高血圧 6名，膝や肘の痛み5名，心疾患3名，睡眠不足3名などであった。

②日頃健康のために継続していること

「ある」と回答した人は 34 名であった。
歩いたり自転車に乗ったりして体力をつけているという人が最も多く(27 名)，次いで野菜をとるようにするなど食事に気をつけている人(14 名)が多かった。
しかし一方で，健康のためというよりも，生きるために「1 日 2 食食べること」を目標にしているという「今日，その瞬間」を生きている人や，一日中歩かざるを得ない状況ゆえに，返ってそれが健康づくりにつながっていると考えている人もいた。
自己の健康状態がよくないと回答した 26 名のうちで，健康のために継続していることがあると回答した人は 22 名であった。そのうち 4 名は，「高血圧のため血圧計を見つけるたびに測定するようにしている」「尿管結石のため水分を多めにとるようにしている」など自己の健康状態に合わせた健康行動をしていた。

③健康を保つためにしてほしいこと

「ある」と回答した人は 23 名で，安心して休める場所(8 名)，食事の提供(7 名)，仕事がほしい(4 名)，血圧計の設置(3 名)，無料健診(2 名)などであった。

（5）評価アンケートの結果

「現在の健康状態」「健康コーナーの利用頻度とその内容」「利用してからの健康意識と行動の変化」「その他要望」の 4 項目について聞き取り調査をおこなった。協力者は 31 名（男性 30 名，女性 1 名）であった。

①現在の健康状態

健康状態は「よい」と回答した人は 10 名、「悪い」と回答した人は 20 名であった。
「悪い」と回答した人の症状は、高血圧、ヘルニア、糖尿病などであった。

②健康コーナーの利用頻度とその内容

利用頻度については、「ほぼ毎回」の人が 13 名、「ときどき」の人が 11 名、「これまでに数回程度」の人が 7 名であった。
利用の内容については（複数回答）、血圧測定 20 名、体重測定 11 名、体脂肪率測定 9 名、耳かき 8 名、綿棒 10 名、爪きり 3 名、マスク 17 名、塩 7 名であった。

③利用してからの健康意識と行動の変化

「変化があった」と回答した人は 23 名、「なし」と回答した人は 5 名であった。
「変化があった」の内容は、「風予防のためにうがいを心がけるようになった」「病院に通院するようになった」「体を大事にするようになった」「こういう生活（野宿）を脱したいという気持ちになった」などであった。
「変化があった」という人のうち、利用頻度が「ほぼ毎回」は 12 名、「ときどき」は 8 名、「数回」が 3 名であった。
また、健康状態との関係では、「健康状態が悪い」と回答した 20 人のうち「変化があった」と回答した人は、14 名であった。

④その他要望

要望が「ある」と回答した人は 4 名、「なし」と回答した人は 22 名であった。また「なし」と回答した人のうち、「感謝している」と発言された人は 12 名であった。
要望として挙げられた内容は、「風邪薬があればいい」「その時々で流行している病気の情報がほしい」などであった。
要望が「ある」と回答した 4 名のうち、健康に対する意識や行動が変化したと回答した人は 3 名であった。
要望は「なし」と回答した人のうち，「感謝している」と発言された 12 名のすべてが，「変化があった」と回答していた。また，残りの 10 名では、「変化があった」とする人は 5 名、変化はなかったと回答した人は 5 名であった。

(6)成果のまとめ

ホームレスの人々の生活の場での、定期的で継続的な健康支援活動は、次の点において成果が得られた。
①食事という生活場面の中に、健康コーナーとして健康を知る機会を設置したことにより、健康について意識しやすく、行動を起こしやすいという点に意義があった。
②健康コーナーを誰でも自由に利用できる空間にしたことが、当事者同士が自由に語らえる場所となり、相乗的に健康を高めあうことにつながった。
③自己の健康状態を知る機会を提供することによって、日ごろ、その機会を持たない人々が、実際に自己の健康状態を知ることができた。これによって、自らの生活を振り返り、健康への意識が変化したり、生活改善につながったりした。また、健康や病気に関する知識や、うがいやマスクの使用法を伝えることによって、生活の中でできる健康行動を獲得していくことにつながった。
④健康コーナーを積み重ねるごとに、研究者と当事者との関係が構築されていった。研究者は、「健康」のことだけではなく、日常生活の中のありふれた話題も意図的に聴いていくように心がけた。そうする中で、「専門的な相談をする相手」としてだけではなく、「ごく身近な話し相手」として関係が発展していった。これは、互いに思いやる関係の構築であり、このことが時に健康コーナーを利用している人々の「背中を後押し」することにもつながった。また、「実は…」というように、生活の希望が語られることもあり、専門的なサポートにもつながった。
⑤「日常生活の場所」で、「継続的」かつ「定期的」な健康支援方法は、ホームレスの主体

的な健康の促進につながる。また、「互いに思いやる身近な存在としての関係」の構築は、「日常生活の場所」で、「継続的」かつ「定期的」に行ってきた活動の成果であるが、その一方でこの関係の構築が支援関係の基盤であったともいえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）
①白井裕子，ホームレスの健康を促進する看護支援のあり方，第 11 回日本地域看護学会学術集会，平成 20 年 7 月 6 日，琉球大学医学部（沖縄県西原町）
②白井裕子，炊き出し利用者の健康への関心とニーズ調査，第 13 回日本在宅ケア学術集会，平成 21 年 3 月 15 日，大阪府立大学中百舌鳥キャンパス（大阪堺市）
③白井裕子，ホームレスの人々の健康を促進する支援活動，第 12 回日本地域看護学会学術集会，平成 21 年 8 月 8 日，OVTA；オブタ（千葉県千葉市）
④白井裕子，ホームレスの人々の健康を促進する支援活動 第 3 報，第 13 回日本地域看護学学術集会，平成 22 年 7 月 11 日，北海道立道民活動センター（北海道札幌市）

６．研究組織
(1)研究代表者
白井　裕子（SHIRAI HIROKO）
愛知医科大学・看護学部・助教
研究者番号：40351150

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：